日経連載『私の履歴書』研究に学ぶ

2023年11月8日(水)
CGネット・自主研究会

元住友銀行専務取締役・元広島国際大学教授　岡部陽二
URL； http://www.y-okabe.org
E-Mail; tho@bp.iij4u.or.jp

日経連載『私の履歴書』の概要

- 『私の履歴書』は、日本經濟新聞朝刊最終面（文化欄）に掲載されている連載読み物である。1956年（昭和31年）3月1日に開始。67年間、毎日欠かさずに続けられてきた。
- 第1回は鈴木茂三郎で、3月1日から7日にかけて連載された。当初は連載期間が1週間と短かったが、その後次第に長くなり、1987年（昭和62年）からは、毎月1か月間（1日から末日）にわたって1人を取り上げるスタイルが定着。
- 各界の著名人が、出生から連載時に至るまでの半生を描く「履歴書風のの自伝」である。連載開始当初は現役で活躍中の人物が多く、首相在任中の岸信介や自民党幹事長時代の田中角栄も五十代の頃に登場したが、次第に主に第一線を退いた人物を取り上げるようになった。執筆中に他界した人物は取り上げない。
- シリーズの連載は2022年（令和4年）末までで880回、取り上げた人物は879人に及ぶ。両者が一致しないのは、松下幸之助が2回登場したためである。
- 職業別では、経済人が4割弱を占めているものの、芸術家も26%と多く、バラエティーに富む。
- また、1991年に外国人としてJ・ウイリアム・フルブライトが初登場、その後は年に2名登場する年もある。これまでに、マーガレット・サッチャーやトニー・ブレア、ジョージ・ブッシュ、スハルト、リー・クワンユー、マハティールなど、著名な政治家など37名が採りあげられている。

『私の履歴書』研究家・吉田勝昭さんのプロフィール

- 吉田勝昭(よしだ・まさあき)さんは、1942年、香川県の生まれ、関西学院大学法学部卒。
- 1966年、日本ケミファー（株）入社、営業、総務、人事、経営企画などを歴任、2009年、専務取締役で退任。
- 中小企業診断士本部理事、日本ユースリーダー協会専務理事、（財）天風会評議員など幅広く活躍。任意団体「私の履歴書研究会」主宰。
- 日経新聞の名物コラム『私の履歴書』の研究をライフワークとする吉田さんは、本年7 月、シリーズ4 冊目となる著書「『私の履歴書』100 人が教えてくれた人生を生き抜くヒント」を刊行。
- 吉田さんは社会人2 年目の23 歳の時に『私の履歴書』に出合い着目、以来58 年間、ビジネス・ヒントや生き方の教科書として愛読し、登場人物をあらゆる角度から整理・分類して深奥を追究している。

『私の履歴書』研究書を4冊を刊行

- 最新作「『私の履歴書』100人が教えてくれた人生を行き抜くヒント」（左端）は、昨年9 月までの876 名の登場人物の中から100 名を厳選し、その人柄や時代背景、知られざるエピソード等をコンパクトにまとめた特別編集ダイジェスト版である。アマゾン“Kindle版”の電子出版も同時に刊行された。
- これまでに、右側から順番に、2012年3月に最初の作品「ビジネスは『私の履歴書』が教えてくれた」、2017 年8 月に2 冊目の本『人生を「私の履歴書」から学ぶ』、翌2018 年5 月に3 冊目『「私の履歴書」61 年の知恵』が出版されている。

『私の履歴書』研究会の活動

- 吉田勝昭さんは『私の履歴書』研究を自分ひとりでやるだけではもったいないという思いから、2017年2 月に『私の履歴書』研究会を立ち上げられた。この勉強会では、月一回、その月の登場人物について、会員全員がレポートを提出して感想を語り合い、登場人物の人物像の理解を深めている。
- 2023年7月29 日には『私の履歴書』を楽しく読もう会を日本プレスセンター10F のレストラン「アラスカ」で92 名の参加を得て盛大に催された。

- この会では、日経新聞の元編集委員・小牧利寿氏をゲストスピーカーにお招きして、マハティール（マレーシア首相）、H.M.スハルト（インドネシア大統領）、リー・クワンユー(シンガポール首相）、フィデル・V・ラモス（フィリッピン大統領）というアジア4巨星の履歴書編集時のご苦労や裏話を拝聴した。
- 吉田さんは、今回の本の出版でたくさんの感想をもらったが「これからの日本を背負う若い人の参考になる気がする」という言葉がうれしかった。今後も継続して拡げていきたいし、過去の歴史としてではなく、人として生きる人生の指南書として役立ててほしい」と切に願っている、と述懐しておられる。

吉田勝昭『私の履歴書』研究のホームページ

- https://biz-myhistory.com/

- このサイトは、吉田さんが日経掲載の『私の履歴書』すべての登場者を収録・整理し、経歴、記事の論評などを行なったエンサイクロペディア。
- さらに、興味ある話、愉しいエピソードなどを収録している。
- 『私の履歴書』には、それぞれの職業の専門家でないと語ることができない技術やノーハウが豊富に描かれている。このサイトでは、これをいろいろな角度から抽出して要約されている。これを読むと、自分とは違った未知の世界を知ることができ、驚き、深く感動し、人生の奥行きを拡げることができる。
- 閲覧件数は、毎月、1万件弱にに達している。

『私の履歴書』研究会～今後の拡充計画

- 専用ホームページの充実を進める。興味深い情報、面白い話、愉快な情報、心に沁みる話、専門家からの情報などに切り分け、それぞれの分野を楽しむHP愛読者を全国的に増やす。

- 登場者や取材者を招待して、『私の履歴書』を深掘りして紹介する。

- 電子紙芝居（PPT版）出張公演を行い、『私の履歴書』研究会メンバーが感動を受けたエピソードや人物像を紹介する。

- 『私の履歴書』を題材にして語り合うサークルが、他にもあれば、彼らとの連携の輪を広げていく。

《付録》

自分史執筆の勧め

～自分史「国際金融人・岡部陽二の軌跡～好奇心に生きる」の体験から～

- 本書の総字数は、12万字弱。これは日経「私の履歴書」の2.3倍。写真は62点で2倍強。
- HPへのリンク；https://www.y-okabe.org/recollect/-.html

紙の本、電子書籍、ホームページの3方式で公開

- 本書は当初子供や孫などの近親者とごく親しい友人のみに配布する考えであったが、折角出版するからには、読者層を拡大して一般にも公開すべきかと考え直した。そこで、①紙の書籍出版は400部に留め、②アマゾンのKindle版で出版、③さらに全文をホームページ上で公開した。
- 結果的には、ホームページ版が最もよく読まれ、予想外の反響があった。
- 電子書籍やネットでの公開は、出版後も随時自由に変更・修正・増補ができる点にメリットがある。
- 当初、友人の勧めで朝日新聞社に依頼する積りで計画したが、同社の頑な編集方針とDX化への消極姿勢に嫌気を覚た。そこで、吉田さんに頼んで、日経に紹介していただき、インタビュー・編集を同社OBの杉本哲也氏にお願いした。

本書執筆の動機と執筆に当たり心掛けた点

- 国際金融マンとしての実体験を自分史の中核に位置づけた。

- 2017年に藤原作弥氏(1937年生まれ、元時事通信記者・日銀副総裁)の講演「昭和時代に生きる」を拝聴し、私も同氏とほぼ同じ終戦翌年の1946年一年間を旧満州の安東で過ごしていたことを知った。
- 私より3歳若い同氏の著書「満洲、少国民の戦記）に触発されて、ほとんど忘れ去っていた当時の体験を「一満州難民の体験記」にまとめ、日本工業倶楽部の会誌に投稿した。これを読んだ娘に「こんな話は初耳と」指摘されて反省、自分史の執筆に踏み切ったもの。
- 自分史執筆に当たっての心掛けとしては、
  ①現代史の中に自分人生を重ねる（立花隆「自分史の書き方」）
  ②自伝とは人生を肯定した文学であるべき（石田修大「自伝の書き方」）
  ③名もない人、ごく普通の市民が自分の人生を振り返って書くのが自分史（前田義寛ほか「失敗しない自分史作り」）、かけがえのない生きた証を子孫に残す心掛けが肝要、といった視点。
- 記述の客観性を担保するには、編集者の協力が不可欠。「私の履歴書」で培われた日経の編集力は流石に優れたプロの技であった。

自分史への反響（1）

- アマゾン電子版Kindleへの書評投稿が10編、まったく未知の方からの投稿も。
- コメントの多くは、満州での難民体験や退職後の大学教授時代に関心が集中。同世代の故東大名誉教授・増子舜先生からは「私の体験と一致するのは、下着の縫い目に沿ってびっしりくっついた虱を両手の爪先をうまく合わせて根気よく潰していくのが日課となったという一節であった」とのコメントを頂戴した。
- 毎日新聞が「ひ・と・も・よ・う」で、この自分史を紹介してくれたのは驚き。

毎日新聞　2018年（平成30年）11月15日（木）夕刊　3版　文化　4

ひ・と・も・よ・う

元銀行マン、充実の自分史

旧住友銀行（現三井住友銀行）元専務の岡部陽二さん(84)＝写真＝が「国際金融人・岡部陽二の軌跡～好奇心に生きる～」と題する190㌻の自分史をまとめた。「多くの人とのネットワークがあってこその人生だった」と振り返る。

社交団体の会報に、旧満州（現中国東北部）で過ごした終戦前後の思い出を寄稿。それを目にした娘が父親の体験について全く知らなかったことに衝撃を受け、生涯の記録を残そうと思い立った。

プロの編集者から助言をもらい、「より客観的で正確な記述を心掛けた」。母の行商を手伝った旧満州時代、妻との出会いや子供の誕生、13年半のロンドン駐在生活、意図せぬ大学教授への転身――。自身のホームページ（HP）で11年前から、エッセーを書きためていたことが役に立った。

書籍化するとともに、HPで全文を公開。知人や親戚からの評判は上々だが、読み返すと「会社や仕事について、まだまだ書き足らない」。今後、HPで補足していくつもりだ。【窪田淳】

人・模・様

自分史への反響（2）

表彰状

岡部陽二殿

あなたが文筆を通し永年証券界のため尽くされた功績は極めて顕著であります

よってここに東証ペンクラブ文化賞を贈呈してこれを表彰します

平成三十年十一月五日

東証ペンクラブ
会長 山口 茂

- 東証ペンクラブからの受賞はまったく予想外であった。銀行マンが証券マンの集まりから賞を頂戴したのは望外の幸せ。

- 最大の驚きは、昨年10月に中公新書で「高坂正堯～戦後日本と現実主義」を出版された中央大学教授の服部龍二先生から、インタビューに応じてほしいとのお申し越しがあったこと。
- 高坂の幼年期のことが全く分かっていなかったところ、この自分史には、①中・高時代の洛北塾での交遊、②大学入学後の京一中洛北同窓会での永末英一元民社党党首との邂逅、③ロンドンでの国際戦略研究所への往訪などを中心に高坂正堯の人物像が鮮やかに描かれている。
- これらの小生の記述は、高坂正堯の幼少期における思想形成の背景を知るうえで大変貴重な資料とおっしゃられ、自分史の「資料的価値」を再認識した。
- このインタビューは「元住友銀行専務取締役岡部陽二インタビュー～学生時代の高坂正堯」と題した学術論文として、2020年3月13日発行の中央大学「総合政策研究」誌に掲載された(A4、18ページ）。 https://www.y-okabe.org/writings/post_419.html
- まさに「瓢箪から駒」の出来事であった。